

翠
龍

上
之
二
三



ホカウハ
百頭

野

と書ふらんこり

愛の舟思はるるにれ敷うひそ者人

よそをさるへけり

ひらよをひさくもの

淮南子 聖南棺者欲民之疾也 聖南賣也

孟子公孫丑。矢人惟恐不傷人。巫人惟恐傷人。巫近而然。

故術不可不慎也。注。巫者為久祈祝。利人。生近者作為

棺槨利人。死。趙岐注云。巫欲祝。始人。近梓匠作棺。欲其

發佳。利在於人死也

和名集云。棺音クハ。和名北止岐。取以盛屍也

ゆい子ごり

二。一。三。五。二。二。四。一。一。三。一。二。二。一。

如比黑白たるをひさくへて。かうへて。に。あ。る。を。除。也

まのさか 脱字をまのさか。と。む。位。安。し

て。間。接。の。義。や。う。へ

水るをとりあそび

唐甲遊若隱箕山。高祖幸其門。曰。先生世佳。不口登回。

臣泉石。隱。頭。烟霞。痼疾

けはの奈も賀茂の奈也。目人々あひら
 け漫をかく所也。賀茂松尾の社。目
 事根。又。道具。あひら
 くらゆ。栄雅の。あひら
 み。あひら。あひら。あひら
 は。あひら。あひら。あひら
 乃。あひら。あひら。あひら
 周防。周防守。継仲。女。冷泉院。女房
 少。あひら。あひら。あひら

中々。あひら。あひら。あひら
 一。あひら。あひら。あひら
 ひ。あひら。あひら。あひら
 一。あひら。あひら。あひら
 枯。あひら。あひら。あひら
 枕。あひら。あひら。あひら
 野。あひら。あひら。あひら
 くら。あひら。あひら。あひら
 武。あひら。あひら。あひら
 に。あひら。あひら。あひら

めはうらをかく目けのからばくし典業察あ
 ちめ乃ほくみまもる群臣に業を路る也
 乃てを以てひびりにされ悪鬼をくらふ
 本文傳あり 荆楚歳時記より長命綏續命
 とあゆもつれりし

枇杷皇太后 昭宣公女 朱崔院母 后穂子。

折るぬ祿を 千載集 弁乳母

高齋系洞の玉女めまて折るぬ祿を
 うまひは 此に傳は 玉女一あや

めはあはれは 浣野のあはれ物とわひ

浣野の寝殿よりせり也 ああなるまのいに

生る物なれは祿をうら人の引もてありけり

きよあはさうのまの刺拾遺に載らる

詞あり枇杷乃皇太后也かされせ路あのみ

清帳のうらを何いなくんはせゆりされし

うは路るさうら高齋とるまのゆり

をんていめはとわ

新花^{ニハナ} づらじらぬまゝに 折れもつらうらむ
 ひま^{ヒマ} 菊^{キク} 黄菊^{キキク} もほしく 菊^{キク} 折れは
 たる^{タル} 菊^{キク} ばさるる 壺^{ハチ} 一^{ヒト} 壺^{ハチ} 一^{ヒト} 壺^{ハチ}
 介^ケ せも まれる 物^{モノ} が つかぬ せも つかぬ
 花^{ハナ} も 見^ミ ならぬ せも つかぬ せも つかぬ
 なみ^{ナミ} せも つかぬ せも つかぬ せも つかぬ
 して 眞^{マコト} なる せも つかぬ せも つかぬ
 松^{マツ} の 妙^{ミウ} 妙^{ミウ} 唐詩^{タウシ} 鼓吹^{コブイ} 李賀^{リカ} 五粒^{ゴリツ} 松^{マツ} 此
 歌^カ 作^{サク} 何^{ナニ} と あり 五^イ 葉^{エフ} 松^{マツ} あり

自陽雜俎^{ジヨウザル} 世言^{セゴン} 松^{マツ} 五粒^{ゴリツ} 者^{シヤ} 粒^{リツ} 當言^{トウゴン} 言^{ゴン} 言^{ゴン} 自有^{ジヨウ} 三種^{サンシュ} 名^ナ 鬚^{シュ} 皮^ヒ

如^{ニホシ} 鱗^{リン} 申^{マシ} 結^{ケツ} 實^{ジツ} 多^タ 新^{シン} 羅^ラ 多^タ 地^チ 種^{シュ}

八^{ハチ} 重^{ジュウ} 檜^{ヒノ} 一^{イツ} 葉^{エフ} 院^{エン} の 内^{ウチ} 付^{ツキ} なる けい^{けい} を 檜^{ヒノ}
 人^{ヒト} の ち^ち もり せむを 沛^沛 あり けい^{けい} なる けい^{けい}
 ぬ^ぬ けい^{けい} なる けい^{けい} なる けい^{けい} なる けい^{けい}
 い^い の なる けい^{けい} なる けい^{けい} なる けい^{けい}
 吉^{キチ} 野^ノ 乃^ノ 花^{ハナ} 古^コ 今^{イマ} 序^{シヨ} 春^{ハル} 花^{ハナ} けい^{けい}
 山^{ヤマ} の 檜^{ヒノ} 人^{ヒト} 檜^{ヒノ} 心^{ココロ} 乃^ノ 雲^{クモ} 乃^ノ 乃^ノ 乃^ノ 乃^ノ
 左^サ 近^{キン} 乃^ノ 乃^ノ 乃^ノ 乃^ノ 乃^ノ 乃^ノ 乃^ノ 乃^ノ
 二^ニ 乃^ノ 乃^ノ 乃^ノ 乃^ノ 乃^ノ 乃^ノ 乃^ノ 乃^ノ

福らけこらきく 福らけの梅のふもと口まへ
梅もさや万葉なほほや見ゆかりの二おのふ
はにかも福らき人か

こらめいハ事かせこらきくさん也
梅と書。王判の詩山櫻抱石映松

枝にさや花所最選 只有春風猶宗真 紫香渡水熱

全芳備祖にハ梅桃の部に入ら

東坡詩二月梅晚素香此地意

みくら家よきぐさ入るがどへ付けたりかの

梅のまれ枝よじよじ

永福門内侍 子よまうらる宿

かた言為世 くらおほるん

杜牧詩霜葉

紅於二月花といひ或ハ又新緑勝花さよ

池もら蓮 謝靈運 庐山よ入る。東林乃

池を埒。蓮をうへうの蓮を賞ぶらりののほほれ
どもとらしらまらうの園後并あり

めてこれ物あり 素とまら物也と云也

よころかう 桔梗也 古人の物のみはあ。秋

ちううが六ぬよとら白き花をまらうまはしとい

るわきあり

志をに 紫苑也。にとびと。海と

われしう ちらうる白と云る也と云説あり

しうの霜枯まみ くれとかう。秋一志

まらう白いありあり 袂衣

月令 龍膽也

芙蓉 月令。菊と出菜花とあれ。菊も芙蓉

かろは正色と云

はくやう ちいさな色河海も細く群あり

かろめさたる名 奇性のそのまを素樹

て非農と知れらひの中草にいへんとい

水がこめれまらうのまらうと云る也

海石榴の博望が西域の使してあり。子種と

唐来の中国よりしるまの韓退之王元之也

吟詠をいへとありは海棠の海外あり

古人の賢^{カキ}なり老^キなるもの老^キとく^クなり。家^イは^ニ倭^キ
 石^{イシ}れ^ニめ^クく^ニく^ニを^シ義^ギ後^ゴと^シは^シ唐^{タウ}れ^ニ元^{ゲン}載^{サイ}の^ノ胡^コ柳^{リウ}
 八^{ハチ}古^コ名^ナ昔^{セキ}れ^ニ石^{イシ}崇^{ソウ}の^ノ錦^{キン}牛^ウ障^{ショウ}が^ニ千^チ里^リあ^リし^ト。
 一^{イチ}く^ク益^{エキ}あ^リし^トも^モ伏^{フク}波^ハ将^{ショウ}軍^{ケン}の^ノ賊^{サイ}を^シ親^{シン}族^{ゾク}故^コ
 旧^{キウ}よ^クく^ニは^シほ^シと^シて^シ世^セの^ノ人^ニの^ノあ^リあ^リと^シけ^ル守^シ
 後^ゴ乃^ノ叔^{シク}あ^リし^トも^モ誠^{マコト}な^リし^トも^モ志^シあ^リし^ト。

悲^ヒ回^{クワイ}院^{イン}竟^{ケイ}蓮^{レン}上^{ジョウ}人^ニの^ノ俗^{ソク}姓^{セイ}は^シ三^{サン}浦^ポ乃^ノま^ニあ^リ
 一^{イチ}く^クや^クも^モつ^クも^モ武^ブ者^{シャ}也^ニあ^リし^ト人^ニの^ノあ^リし^ト。
 物^{モノ}ご^トち^ニす^クも^モ吾^{アツ}妻^メ人^ニの^ノあ^リし^ト。
 の^ノあ^リし^ト。
 一^{イチ}く^クも^モあ^リし^ト。
 も^モあ^リし^ト。
 日^{ニチ}人^ニの^ノあ^リし^ト。
 か^カも^モあ^リし^ト。
 か^カも^モあ^リし^ト。
 か^カも^モあ^リし^ト。

Hei 50th, vol. 1

姫乃事なごいひか。吾孺かとのぬひ。
 一わあまをまつあまの日本紀はたれども順
 ぐ和名もとの文選を引ても都をうつりや
 一しあれは東方のまはるる海に
 されど大なる関東をけりてなるわ
 取つられのこそ。聖の竟蓮也。これより竟
 蓮は答詞あり
 言わけく かし字甚しきあまあり

人々ともありき。一はくはのせあり
 昔妻なるまうけく。あまのまはるる
 とおすも。一はくはのせあり
 也。あまのまはるる。あまのまはるる
 情も。あまのまはるる。あまのまはるる
 一子なごいひか。あまのまはるる
 と。あまのまはるる。あまのまはるる
 ねるも。あまのまはるる。あまのまはるる
 也。あまのまはるる。あまのまはるる
 一はくはのせあり。あまのまはるる
 人々ともありき。あまのまはるる

堂上言而善。叔向曰。必齟齬也。不堂執事。其以上白子
如不言。吾幾失子矣。

其責也。 心るに田舎人也。

礼記雜記下。孔子曰。少連大連。善居喪。三月不怠。三月

不解。期悲哀。三年憂。東夷之子也。淫言其生於夷狄而

知礼也。

子故にこそ是乃あられを 池の底に頼り

をたしけ。慈谷う敷盛を多しんたり

も我子れも心もふも也。父子のなる天倫

され。ちんりあられと。いづらん陶陶の

を。い。我子の。送りて。海う。新氷。れ。帯を

い。い。是。又人の子也。く。遇。い。く。と。く

は。仁。愛。の。る。也。され。ば。子。く。く。又。母。の。心。を。も

て。ま。の。ん。と。せ。る。な。の。つ。く。孝。と。も。く。え。れ。は。れ。い

不。求。羊。子。の。事。又。法。能。也。と。つ。る。子。を。い。ふ

こ。い。い。あ。や。な。い。と。い。ふ。は。あ。も。あ。い。い。也

い。い。す。み。 白氏文集偶吟詩。眼下有衣。無有

食。心。中。無。喜。亦。無。憂。客。匹。如。身。後。有。何。事。應。向。人。間。無。所。求。

静。念。道。徑。深。閑。目。閑。迎。禪。客。小。低。頭。摘。殘。少。許。雲。泉。

魯。威。龍。門。教。度。遊。

人母成て思ひ百姓を子のごとく愛するにどり
て下れたるもさうげん
ぬしをみをもさうへき

後漢書。吳祐順帝時。膠東侯相。祐政惟仁簡。以身率物。吏
民懷而不欺。番禹孫性私賦民錢。市衣以進其父。得而怒
曰。有君如我。何忍欺之。促取伏罪。性慙懼。詣相持衣自首。
祐屏左右。問其故。性俱述。父言。祐曰。掾以親故。受行辱之。
名。所謂觀過斯知仁矣。使敬謝父。還以衣遺之。

大恒れ産るに財を

孟子梁惠王上篇曰。無恒産而有恒心者。惟士為能。若民則
無恒産。因無恒心。苟無恒心。放辟邪侈。無不為已。及陷於罪。
然後從而刑之。是罔民也。焉有仁人在位。罔民而可為也。是
故明君制民之産。必使仰足以事父母。俯足以畜妻子。樂
歲終身飽。凶年免於死亡。然後驅而之善。故民之從之
也。輕。黎民不饑不寒。然而不至者。未之有也。

人さすもつてぬしをみし

家語云。獸窮則攫。鳥窮則囓。人窮則詐。

福語

小人窮する時に濫しとあつては好也

凍餒 孟子盡心篇所謂西伯善耆耄者割其田里教之
樹畜道其妻子使養其老五十非帛不煖七十非肉不
飽不煖不飽謂之凍餒文王之民無凍餒之老者非
之謂也

これ書とみたるを字ひり人の義理を
故に飢寒もさまされども西事とせしこ
もを恒にありとせしやれ人の百千人中
にまされ也大方人の困窮よりぞみたる餓
事をのゝおほしき事とせしむる也されは老
乃政の人の飢寒をぬやうする也耕作とせ

とらふしむるは勝の飢をぬぐは桑麻とせ
まの布帛地産さぬる膚体の寒をぬぐは
林川澤民と利を同一とて一人の私とせむ
ゆは村吏もさむるて屋舎とせむ
やしく身歎れ肉くみに乏しくす農人の
おほく申すも定めて田畠をあげてよく作
らせしむる意に在るもけしむる是を民の
極の度とせ也君より出民とせむみせらる
ゆる飢字を其意なり衣食は事とせむて教
をせむるは食肉動さるるに異れ

孟子盡心篇

三十四

父子君臣夫婦兄弟
 朋友は五典と教て孝悌忠信とありし
 びる也。人間の長は五の徳をもちける。と行ふ
 理がわらう人の心の中よりあり。人といふは
 射して忠といひ父母は射して孝といふ是
 仁義の中心也。よく是を射射の勤て善とあ
 して悪をひなすのづからなるなり。是聖人
 教を乃る也。是を王道といふはよく善と善の
 政孔孟をく一皆めばきんり為也。世襲は若く
 らくしてたこれにあらざるなり。百世に傳はるる

けり。一日の飢寒たるはぬらぬら
 況や父兄は仕へ妻ををせらふべし。事くわげ
 ぬ。或はつらつら曲りて悪くもよ。或は
 ちり書夜とふかす。人を殺しぬ。おとみや
 してはるあり。我もる貧乏も老の真夜は若
 志むし。必死して不富あり。富りの七南
 附若し。し事い。つらつと不富あり。つら
 心をほむそ。みまはうれし不富あり。やが
 なるれ。罪をたよ。罪あり。あつと。おや
 上らつて。富のつらつと。利よし。

ほとけのふりて、^{ミコト}まかせるふりて、^{ミコト}まかせるふりて、^{ミコト}まかせる
 と安穩に^{ヤスニ}まかせるふりて、^{ミコト}まかせるふりて、^{ミコト}まかせる
 まかせるふりて、^{ミコト}まかせるふりて、^{ミコト}まかせるふりて、^{ミコト}まかせる
 なるを行ひて、^{ヨコト}國家を治める文王の武師也
 といふべし。

人は終焉^{シユエン}なるは、^{ミコト}まかせるふりて、^{ミコト}まかせるふりて、^{ミコト}まかせる
 人の心^{ココロ}をなすは、^{ミコト}まかせるふりて、^{ミコト}まかせるふりて、^{ミコト}まかせる
 といふべし。

あら、^{ミコト}まかせるふりて、^{ミコト}まかせるふりて、^{ミコト}まかせるふりて、^{ミコト}まかせる
 といふべし。

終焉^{シユエン}の條終也。馬^{ウマ}の助字也。

あら、^{ミコト}まかせるふりて、^{ミコト}まかせるふりて、^{ミコト}まかせるふりて、^{ミコト}まかせる
 といふべし。

おどよぶる給事れ。傷害のをうれおらひ
まじきあはれもてかちもめつたはほりわて
こころ給事れ。是既よそあやぶみの上はら
しあわとらさる。ほくくして矢よあそめ
うを給事れ。

沛沛

沛艾 文選籍田賦。龍驤騰驤而沛艾。注。馬行兒

け相をたはを侍り 原氏相奪やまあはら

を おほきて

いつのあやまらる。のけ字也。

莊子達生篇。東野稷以御見莊公。進退中繩。左右旋

中規。莊公以為文弗過也。使之鈎百而久。顏闔遇之。入

見曰。稷之馬將敗。公密而不應。少焉果敗。而及公曰。子

何以知之。曰。其馬力竭矣。而猶求焉。故曰敗。

家語。魯定公問於顏回曰。子亦聞東冶墜之善御乎。對

曰。善則善矣。雖然。其馬將必逸。公不悅。其後二百。東冶墜

之馬逸。公問之。促駕召顏回。回曰。至。公曰。前日。寡人問

吾子。以東冶墜之御。而子曰。其馬將必逸。不識。吾子奚以

知之。顏回對曰。以政知之而已矣。昔者。帝舜巧於使民。

而造父巧於使馬。舜不窮其民力。造父不窮其馬

加^カ是以^{シテ}舜^ニ無^ク逸^ク民^ニ逸^ス父^ト今^ニ逸^ス馬^ト今^ニ東^ニ治^ル畢^カ御^也
歷^レ嶮^ヲ致^ス遠^ク馬^ノ力^ヲ盡^ス矣^ト然而^モ其^ノ心^ヲ猶^テ求^ム馬^ト不^レ已^ス臣^ニ以^テ此^ヲ知^ル
之^ヲ公^曰善^哉吾^子之^言其^レ義^大矣^ト願^シ少^シ進^ム親^ク
回^リ曰^ク臣^ニ聞^ク之^ヲ烏^ノ窮^則喙^ヲ歎^ク窮^則擗^テ人^ノ窮^則詐^ス馬^ノ
窮^則逸^ス自^古及^今未^ダ有^ル窮^ニ其^下而^能無^ク危^キ者^也
公^悦群^書治^要十^ノ
明^云久^シ我^ノ太^政大^臣雅^實云^ク孫^頭通^子也^山門^ノ
の^座主^也

箕^剛はあ^りて^てせ^給じ^きり

妻^永二^年天^台を^履ま^の雲^雀の^心を^法住^寺に^依り^て招^キ
後^弘治^二年^十月^十九^日木^曾義^仲兵^を率^して^法住^寺に^依り^て敵^を
を^まや^ぶる^僧に^馬を^乗て^道を^行き^給ひ^きり^て木^曾
曾^が大^將楠^六郎^親忠^が放^矢し^て其^ノ腰^に骨^を射^し
せ^て真^逆に^落給^ひ立^しあ^がり^給ひ^きり^て親^忠
が^郎等^を落^重て^其頭^をと^り威^義記^三十^四と^いひ^きり^て
其^レ相^の周^仁叔^服單^國の^唐奉^漢口^公許^負が^勤
し^る也^ゆり^て貴^賤の^ちを^分り^し其^力を^示し^り
吉^島に^あり^て掌^をと^り麻^衣道^を人^に相^續す^也

らう。素忠徹古今識鑑を撰ぶ。其さるる者福ある
 者老貧賤るる者天死の者刑傷は者盜賊の者これ
 其國説と稱す。類例を挙ぐるもこれ孔子形陽
 虎は似て虞舜項羽重瞳一様は看するもこれ其術
 必とまらばおと痛し。今あまの世に言ふ来り物議
 よう趣誠古今れ公論也。今世は明雲おとる。養
 休は六鶴退飛の風吹故る。宋の襄公は何の祥や吉也。
 又も叔興はこれ其問と。誤り陰陽乃て其是か。
 是れ何と誤る也。襄公はなむ年軍よむがれ明
 雲は終る流矢はある。け一候明雲をさし
 さい下を別候とらびらる本あり

炎治あまのは子成然れ。神事すは
 禮あわといふ事ちりく人ありいあ
 也格式ありものんす。其
 格式 煖城を自ら弘仁格弘仁式と撰ぶ
 法和自の時貞觀格貞觀式と撰ぶ。醍醐
 天皇の時延喜格延喜式と撰ぶ。是と三代格

本朝の事

式とリ也律之令とに合するの法家子傳也と云ふ

歐陽唐書の也武德律式令貞觀律令

格式永徽律式令格唐書刑志云古之為國者

議事以制不為刑辟懼民之知爭端也後世作為刑書

惟恐不備律民之知所避也其為法雖殊而用心則一蓋

皆欲民之無犯也然未知文導之以德育之以礼而使

民過善遠罪而不自知也唐之刑書有四曰律令格式

令者尊卑貴賤之等教國家之制度也格者百官

有司之所常行之事也式者其所常守之法也凡

邦國之政必從事於此三者其有所違及人之為惡而

入于罪戾者一斷以律

四十以ほ乃人あり多敷く入て三里をわつ

道に止氣れ事あり必多敷く入

四十以ほれ人明堂文經曰男子三十已上不可不

交三里三里所以下氣也

律考

三十三

事也。天下れ物の上も下も始ハジメに不堪フカシ乃
ゆえにあり。天下れ瓊カサキ瑾シムもあり。はれは
さうへん乃をささた。是をわりし
て故ハシラフ將シラフもこれ母のたうまう。衆人の師
とたう事。法をうのべし。

能ノはひん 藝ゲイ能ノウ也

こらく 由ユあり

堅固ケンゴなるもの 一向カウ初心シンシンの所トコロに義也。
つらぬすに 強固ツヨク強顔ツヨク ありつらぬ。

藝能ゲイノウふしにてと云義あり

天テン性セイ骨コツ 生ナマれつよの器キ用ヨウ也

けつまの 泥ドロなるものなりぬ也

堪カン能ノウ 藝能ゲイノウふしなる器用あり

拙セツけ 拙セツの長ナガなるあり

不堪フカシ うれぬ義也。器用キヨウヨウなるを云

瓊瑾カサキシム 二字ニジとも玉タマれはれ也。取チ辱チヨクあり

の事なるあり

たれたるもの 法ホウなる守モリなり也
故コ將シラフもこれ みるにせむる義也

世セはひん 情カガセなるものなりと云也

げ候老に多りもどかならざら藝よはすてと
 して。一徳さのもえんもやうなれども高適ハ必ず
 して。何れめて詩を学て少陵ふかめり。似極老
 泉ハ三平より何れめて学て。文書平其名を
 得り。ち。詩み。ち。にわらば。師曠が教。あ。あ。よ
 して。学ぶ。ち。物。よ。出。ち。さ。と。中。年。ふ。し。と
 新。日。中。の。行。と。と。老。て。学。ぶ。燭。と。と。う。て。夜
 行。と。と。と。ま。る。ば。さ。あ。ら。い。ゆ。さ。れ。ら。古。詩。を。少
 壯。不。努。力。老。大。徒。傷。悲。け。ん。あ。ら。ん。志。わ。ら。ま。さ。ら
 ば。い。せ。か。し。老。ら。ち。と。い。は。の。べ。う。す。地。あ。ら。ん。

ありゆゑんを危うくもや。聖人の言。五
 十のてびをさす事。な。も。物。を。さ。し。し
 侍事の時。に。及。て。学。を。し。し。け。れ。教。誨
 かなら

西大寺 勢然上人 腰こしの骨ほね白く 誠まこと
はけの心を 換かへて 内裏うちへ 入いりて せしむ
くろく 西園さいえんの 内うちに 大だいなる ありて とうと の 言こと
志こころも ちと 信しん仰やう 乃すなはち こそ あり され 資すけ朝あそ
て 是こゝろを 見みて 年とし々々 ありて ありて ありて ありて
後のち日ひより じく 大だい乃の 清きよま しく 老おいは しく ありて
毛けを げ しく ありて ありて ありて ありて ありて
えて ありて ありて ありて ありて ありて ありて
哉

西大寺 大和國あり。七たをいへる也。拾芥しゅうがい

西大寺

又朝鮮國チヨシ子沙門シニあり形甚矮小カタチニうて雜ニハ僧トとシり
子似コノてあされ人皆ヒトはけつを雜僧ニハとシり
寺テありと檀モウ齋サイ齋サイ齋サイ話ワありてあり

為兼タメカミ大納言入道オホノウケノミチノめとされ武士ウヂノシとシり
因カて六波羅ロクハへウりてい言コトされ清貞朝スケトヒサカサとシり
わつありてい言コトをシてある浦山ウラヤマとシり世ヨ日ニ
あらんといふかくこそありてい言コトされい言コトされ
られけぬ

為兼大納言 見沙門堂と号す

定家為家為教 為兼 権大納言正二位

應長元年依勅撰進玉葉集正和元年養寛テイハツ

同二年十月十七日剃髮同四年十月廿八日

東はとて名とて依後へ流ルせしむ公卿キヤウ補ホ
任シよへて或レ説セふ為兼依後へ流され
和名三十三首と稱阿弥陀佛といふ字をタテ書キ
横ヨコらうのよ換わ是よりとて教シめんとて
嘉元二年ゆラとシり風雅集フウガ為兼ガ東へ
ゆりゆりにちとあを流りては換り

果亦イハレもろろ。滅ヘの死去也

之ノけき川カハの 潘潜子罕篇子在川上曰逝

者如斯夫不舍昼夜程子曰此道体也天運而不已日往則

月來寒往則暑來水流而不息物生而不窮皆与道

為体運乎晝夜未嘗已也

真俗マコト 夫の出世間。俗の世間なり

去られては 六韜云春道生万物榮夏道長万

物成秋道斂万物盈冬道藏万物靜盈則藏三則

復起莫知所終莫知所始

秋アキのコトはシ下ノの心は水の心は秋の心は水

の心は水の心は秋の心は水

小春

四季シキの心は水 四季シキの心は水ありの心は水ありの心は水

也也 也也 也也 也也

論語ルン 論語ルン 論語ルン 論語ルン

程子ケイ 程子ケイ 程子ケイ 程子ケイ

程子曰今夫海水潮日出則水涸是潮退也其涸者已

無也月出則潮水復生却不是將已涸之水為潮水自

然能生也余安道海潮固存古之言潮者多矣哉

漲常在春秋之中。溥之極大常在朔望之後。此又天
 地之常數也。昔竇氏為記以謂潮虛於午。此候於東
 海者也。近燕公著論以謂生於子。此則於南海者也。又
 嘗問於海賈云。潮生東南。此乘舟候潮而進退者耳。
 右今之說以為地缺東南。水散之。海賈云。潮生東南亦
 近之矣。今通二海之盈縮以誌其期。西北二海所未嘗見。
 故潮而不紀。嘗候於海。月加卯而潮平者。日月合朔則
 且而平。後三刻有奇。上弦則午而平。望已前為晝潮。
 望已後為夜潮。此皆濱海之候也。遠海之處則有遠
 近之期。月加酉而潮平者。日月合朔則日入而潮平。上弦則
 夜半而平。望則明日之且而平。望已前為夜潮。望
 已後為晝潮。此東海之潮候也。又嘗候於武山。廣州。月加
 午而潮平者。日月合朔則午而潮平。上弦則日入而平。
 望則夜半而平。上弦已前為晝潮。上弦已後為夜潮。
 月加子而潮平者。日月合朔則夜半而潮平。上弦則日
 出而平。望則午而平。上弦已前為夜潮。上弦已後為晝
 潮。此南海之潮候也。

白氏文集五十三。潮詩。早潮鏡落晚潮來。一月周流
 六十迴。不独光陰朝復暮。杭州老去被潮催。

潮を禰しつらぬたはほり程朱れ祝
理しつらぬ今志つらぬ磯しつらぬのつらぬ
とつらぬのつらぬ事をつらぬのつらぬ
流つらぬつらぬつらぬつらぬつらぬ
つらぬつらぬつらぬつらぬつらぬつらぬ
つらぬつらぬつらぬつらぬつらぬつらぬ
つらぬつらぬつらぬつらぬつらぬつらぬ
つらぬつらぬつらぬつらぬつらぬつらぬ
つらぬつらぬつらぬつらぬつらぬつらぬ
つらぬつらぬつらぬつらぬつらぬつらぬ

大長此大饗をいふはすも亦をいふ事なす
あ。常久事也。宇治友大長殿の東三事あり
てをきたらる。内裏よりありけるはつらぬ
つらぬつらぬ。他つらぬつらぬつらぬつらぬ
つらぬつらぬつらぬ。女信れつらぬつらぬ
つらぬつらぬ

大長乃大饗 大長の官に任せて時
れ饗を應つらぬ

宇治友大長殿 宇治の悪友府頼長公
保元の乱よりつらぬつらぬつらぬつらぬ

忠實云二男法性寺実白忠通公の弟也

東三條殿 按芥中末云四條院誕生所或重

明親王家^{キウシ}。二條南町西南北二町^{キウシ}忠仁公家貞仁公大

八道殿傳領^{テンリヤウ}長久四年四月晦日^{セウニシス}燒失

筆をこれ物々^{ガクキ}れ樂器をともは音をさそん

ご杯^{サカンキ}の盃をふられ酒をさひはらひをされが

ん事を思ふ心^{フセシ}の必事^{タビニ}もふれてまうかありも

不善^{フセシ}の感^{カン}をさすべし^{タビニ}素^ソあつてまはあ^{シヤウ}の^{ゲウ}不^フ善^{セシ}

一句をたも^{ヒトク}の^{ヒトク}と^{ヒトク}か^{ヒトク}く^{ヒトク}前後^{ヒトク}乃^{ヒトク}く^{ヒトク}み^{ヒトク}の^{ヒトク}卒^{ヒトク}

尔^ニして^{シテ}多年^{タニ}其^シ形^シを^シあ^シく^シし^シる^シ事^シあり

か^カら^カふ^カい^カは^カけ^カみ^カを^カし^カら^カげ^カさ^カし^カめ^カら^カす^カ

を^ヲ〜^ヲむ^ヲや^ヲ。そ^ヲ列^ヲ〜^ヲの^ヲ益^ヲあり^ヲ。

み^ミお^ミ〜^ミの^ミ佛^ミお^ミに^ミあり^ミ〜^ミの^ミ事^ミあり^ミ

の^ノ種^ノを^ノ〜^ノの^ノ善^ノ業^ノを^ノ〜^ノの^ノ事^ノあり^ノ

は^ハ〜^ハの^ハ教^ハれ^ハれ^ハら^ハる^ハ〜^ハの^ハ事^ハあり^ハ

は^ハ〜^ハの^ハ禪^ハ定^ハを^ハ〜^ハの^ハ事^ハあり^ハ

〜^ノの^ノ事^ノあり^ノ

〜^ノの^ノ事^ノあり^ノ

本道集卷二

のこころをさうとせし

弟をさうれ 異本に樂器より下を全異

をのまんとおるさいをさうれ双六とん

おのりあり

陳師道思亭記

目之所視而思後之視于戈思闕

視刀鏞則思懼視廟社則思敬視茅家則思安

排之んとをのり 韻會定韻攤他子切手

布也增韻用也按也又廣韻攤蒲四教也集韻亦書

作攤手。鮑宏博經。意錢者河東夫算余父曰詭憶。曰

射意之田射教。即攤錢也

李濟翁資暇集。錢戲有每以四支為一列者。即史傳

所意錢是也。俗謂之攤錢。亦曰攤鋪。其錢不使。晁映真

感也。疾道之故。為其音々攤為蚕。對又音鋪。為蒲。飲

義此耳。今人書此錢戲。率作標。蒲字何。敗標。蒲々甚

耶。案標。蒲。起自老子。今此為呼。盧者不宜。雜其字於

錢。說攤鋪。義較然可見。杜長安。變州歌。長年三

老長歌。裡白晝。攤錢高浪中。笑註曰。攤錢。蜀人賭錢之名

後漢。真傳。少好。意錢之戲。佳。引何。兼大。算。文。詭。憶。曰。

本集卷之三

射意曰射数。即雖錢也

大鏡。師輔公休。たうを給とあり。及ふの事
とちとんいしわ

不善此戲を誅云善戲詭号。不為二也

聖教 經福等を云

あうさゆ 暫れ字也。白地ともあり

率尔 論語注。卒尔。輕遂之見

纒 梵網經。善薩十八物のうらるわ

李白草書哥行宣明。石硯墨色光。吾師復倚
幄床。謂陳素

事理ゆらり へささるるを理も。もし行

を事と。事と理と。似名別り。て一偏は著

し。うと。理障事障と云々。ささるる也。事理不二

わ。うら。八台家。け。論也。外相不背。内證必熟と

あ。い。通。ん。係。於。此。常。獲。さ。り

盃ウヰけうキこキなキしキはキらキ事キのキりキんキはキらキとキ或キの

為キまキ給キのキ事キ當キとキゆキらキさキふキこキらキ

をキさキらキるキやキしキ給キへキとキりキゆキらキらキあキらキじキ

本集卷二

魚道也。流を乃て。はらうまゝ。あつたをよそく
し。あつたをよそく。はらうまゝ。あつたをよそく

凝當 キョウタウ 韻會當丁液及底也。韓子玉色無當註。

無底也 キレソコ

魚道 下学集云。魚道建残也。以餘澄洗不盡。

喻魚過旧道故曰魚道也。魚雖將泳木海終不忘。

旧道者。是又出所味詳也。

みれしとびとびと。糸を踏む。さしひらけ

鱧と貝子似れ。つらとあはれん事あり。

人おろそか。あつたをよそく。はらうまゝ。あつたをよそく

みれしとびとび。公家。袴。或ハ。取道の架

架。あつたをよそく。はらうまゝ。あつたをよそく

を。あつたをよそく。はらうまゝ。あつたをよそく

和名集云。雀島錫食經云。河貝子 和名美奈浴用。鱧。字。非也。音奉。連。鱧。出。鱧。類也。

殼上黒小狭長。似人身者也。

けは。のみ。あつたをよそく。はらうまゝ。あつたをよそく

あつたをよそく。はらうまゝ。あつたをよそく

門の額かほをうらとらふらうらぬるや。勘解
由少海二品福の額くちとら珍ひよかん物
れ核あるも。うらぬもひらぶらうらまど
常の事也核あるまふらまどいふし。諸尊の
行法も法の字とすみそらうら濁りていと
法界も傳は伝ふも常よりうらうら。かほこと
けいおひ

額くち 揚れ字也 大後上安彩公伝よ
よら川のやうら額れうらうらとあり

平家物納よ。額うら福あり。うらぬ。額うら
勘解由少海二品福門 世尊寺行忠也

ひらうら 平張

後摩たく 後摩の梵語也。梵焼の翻とあり。
たうらとまの重言たうら。ゆよ。嫌ふ也。うら。れ。も。梵。説
ほらる。被。お。ひ。所。依。の。水。れ。梵。語。う。ら。て。の。依
乃。水。と。い。ひ。摩。訶。の。大。の。梵。語。う。ら。て。摩。訶。大。迦
葉。う。ら。ん。と。い。つ。わ

法界寺 东山志保谷北近はるあり
拾芥下本云。消閑寺佐伯公行建立

大雁としか
めれたる中に法師もどりておを祿
らるる一きれ法師をこへてはらわ使
願へ出—うわらう。ころもおれを頭目
つけさつて林獄をくれまらう。基俊大納言
別當の時ころん竹わらう

遍照寺 拾芥る廣澤僧正造地 僧正公寛朝

サウシ寺 嵯峨あり

使廳 檢非違使一廳也別當あり職原なり

基俊 久我一門。基具の二男也

汝門の罪を大方轉るおながじつ近代の
弊法也僧尼令しごよ訓戒を垂らわ右晋高
祖ハ佛像くくもの云と云ひおれた。法民を迷し
僧徒を誅。唐の李徳裕ハ甘露寺ハ常伴物
を訴は少つを眾。柳渾を家よ放火せつ後
と刑し業陰比事に入らわ

太衛乃太の字点うううぶらふ事陰陽
けなう相論の事是らうわあちあ

ト侍^シ吉平^ノ自筆^ノ乃^ハ占^ハ父^ノの裏^ヨこれ
ころ御^ニ祀^スを^ハ街^ノ関^ノ白^ノ殿^ノあり^ト占^ハうら^ハし^ク
を^ハま^ハう^ハち^トり^ノ筆^ヲ

太衝^{タイセウ} 筆談^{ヒツタン}云^ク六壬^ハ天^ノ十二^ノ辰^ノ之^ハ名^ナ古人^ノ秘^シ其^ノ義^ヲ云^フ

九月^ニ木^ノ可^シ為^ル枝^ノ幹^ノ故^ニ曰^ク太衝^ト者^ハ月^ノ五^ノ星^ノ所^ノ出^ル也^ト
川^ノ戸^ノ天^ノ之^ハ衝^也

わ^ハら^ハち^ハう^ハ入^リ道^ト

吉平^{ヨシヒラ} 安倍^{アベノ}晴明^ハ子^ト。吉昌^{ヨシチヤウ}兄^ト也^ト。未^カ計^ケ頭^ト。陰^ハ陽^ノ博^ク士^ト。

年八十五卒

ら^ハぬ^ミと^ハ書^トと^ハ口^ト又^トと^ハち^ハわ^ハる^ハ目^ト

ら^ハせん^ハん^ハと^ハ云^フ也^ト

裏^{ウラ}の^ハか^ハれ^ハら^ハし^ハの^ハ中^ノに^ハあ^リる^ハ紙^{カミ}

也^ト。是^レ本^ノよ^リし^ハら^ハゆ^ハる^ハ注^{チウ}釈^{セツ}と^ハ勘^{カン}又^モ

を^ハし^ハる^ハ裏^{ウラ}よ^リし^ハら^ハる^ハ也^ト。今^{イマ}乃^ノら^ハら^ハる^ハ也^ト

省^{カヘラ}書^{ガキ}の^ハこ^トも^ト

范^{シヨウ}曄^ハ父^ノ名^ナ春^ハ也^ト。故^ニ後^ノ漢^ノ書^ニに^ハ春^ハれ^ハ字^トと^ハ太^ト

こ^トあり^ト。大^ノ学^ノの^ハ大^ノ乃^ノ字^ト。鄭^{テイ}玄^ハ讀^ミて^ハ春^ハれ^ハ音^ト

也^ト。し^ハら^ハる^ハ也^ト。朱^{シユ}子^ハら^ハる^ハ章^{シヤウ}句^クの^ハ大^ノ小^ノの^ハ

大^ハあ^リわ^リし^ム云^フ

けいしんをなきて人のけいしんをいひていふ事
 也。用ありていふ事。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。
 然る。久しくいふ事。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。
 され。洞ありの。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。
 事。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。
 伊。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。
 あ。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。
 ら。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。
 ま。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。
 一。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。
 幾。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。
 う。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。
 久。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。
 せ。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。

人のあり 人の祥あり

論語子游曰有落臺滅明者行不由徑。悲公事。味膏。至
 至於偃之室也。

むねいふ事。いふ事。いふ事。我の志同

志。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。
 既。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。
 竹。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。いふ事。

竹七

晋書阮籍字嗣宗不拘礼教能為青白眼青白眼及私出喜喜來而精作白眼喜不擇而退喜弟康聞之乃面酒拔拔琴造為籍大悅乃見青眼由是礼法之士疾之若讎讎籍時玄亭意独加焉不由徑路車迹所窮輒慟突而反反

是ハ人の心を行つて用をのれんとあつたか
きこさういふころてきつるも感もんと也但こ
也きこさういふころ人の心ハ動動ある
るハ心ハあつた

少みもろく 何れ用事ハあつたか
枕草紙枕草紙がう時めたりあつたらあつた
ころ人の心をがはれくといふもあつたらあつた
けい候けい候の心めり也右の枕
草草は候候考合をて見見とて也
けい候けい候の事しる候けい候とて別候とて
中あり候候別候とて也

遠國必多トクキクニ

論語遠人不服則修文以未之既

之則安之スラスラ。内治修然リテ後遠人服有不服則修德ヲ以未之ス

亦不ス當勤兵於遠ニ

風ノあつり。本草序云真誥曰常不能慎事ニ上者ハ

自致百病之本ニ而怨怒ヲ於神靈乎。當風風濕ニ反責ス他

人於朱西復皆ニ痴人也。文慎事上者謂奉勤之事必皆

慎思ニ

その化 地化也

禹ノれゆニて。書禹謨帝曰咨禹惟時有苗弗率ハ

汝徂征禹乃會群后三苗苗民送余益曰惟德動衆無レ

遠弗届禹班師振旅帝乃誕敷文德舞干羽于兩階ニ

七旬有苗格。蔡氏傳云三苗國名在江南荆揚之間ニ

特除為亂者也

わつしはけし血チキうらよあまらん物モノうら

情欲シヤクわが心をあやうくけむる

事。理リをきくしむるは似ニて義ニを思フふ

乃ハて家をほむ。是をコトて。苔コケの枝エダ

まわつしはけし血チキうらよあまらん物モノうら

菅のくもと 彦昭あり。みまの人の衣

はあらしり菅の襖よりんよあまよ

幸な武志感ある年十八して人の妻を

あびて夫を殺す。うらひさへんそあや

まうて女の頸をまきりたす。器りるし

家して名を文管とす。あつ影あり

百年たか 白氏文集才四新樂府并底別録

云為君一自恩誤妾百年身

あらしりあらしりて 年らしては精神お

とらへ。氣血淡薄にしてあ感動しる事

小野小町が事。さあめららるるるるる

くろきぬの造といふあまのうらけ文

がめりちといふ説あれど。お大師の御作れ

録し。ち。大師の承和のうらめられ給

小町のうらめらるる。後のうらめらるる

小野小町 古今席小野小町をいへるの衣

姫乃流さち。あはれなりやうしてはよらうにほげ
よれをうみのなやのほあちのほはよらね
しをうれあういあはれまへし

中院准后親房古今序（中）野小町（中）事。
不（中）の仁明天皇（中）承和の比乃人出羽國郡
司（中）女國色無双の人也。或説（中）弘法大師
ははくしめ給ふ玉造と云物あり。是玉は

くわ乃小町と云者。昔（中）の形とれやまじし
老（中）衰（中）りりさゆははくしめ給ふ也。
然（中）而小野玉造其姓香別のと他人とわ

あ事（中）を難（中）いさゆに。老は（中）沈淪（中）して真

列（中）の方とて今（中）弘法（中）欽（中）実（中）方（中）の長下向（中）の時
ゆ（中）き首（中）れ目の定（中）より。是（中）も（中）さ（中）あ（中）ら（中）

をみそ。そののきもつりして。也。小町（中）あひつ
乃（中）る（中）業（中）平（中）を（中）恋（中）て。あ（中）ち（中）あ（中）ら（中）その（中）ま（中）も

大江（中）惟（中）章（中）と妻とゆ。時（中）ん（中）ら（中）り（中）て。あ（中）ら
朝（中）行（中）り（中）智（中）の（中）あ（中）け（中）り（中）時（中）あ（中）ち（中）い（中）わ（中）い（中）の
あ（中）い（中）文（中）を（中）原（中）秀（中）之（中）河（中）様（中）下（中）時（中）具（中）と

し。その時のあ事。あち
あ（中）ら（中）抄（中）云（中）業（中）平（中）の（中）あ（中）ら（中）か（中）み（中）を（中）さ（中）し（中）と

數書

りのけりうらうら福よあれとらん。數書
 せそあつよのさけらみらぬくよいつて
 やそ嬉しきふしやうらまらぬ。世中よあ乃
 上句と福^平さういふあり。秋風の吹よつきて
 もあなめくといふあやしくさうて。あな
 ぶつ。是を求^{もと}む。あな人^サ。あな死人の
 かへりあり。うらむおれさなをんうよあひせ
 くれ目の穴^{あな}。うらむ一本生^{一本}うらむ風
 うらむひくさうのかくあしきれあやしく
 あなゆれ人^{ひと}よじ事^{こと}と回^{まわ}。或人^{あるひと}捨て云^い。小野小町
 は國^{くに}をさげふ。うらむ命^{いのち}を捨て則^{すなは}頭^{かぶ}は也。
 云^い。あな業^{わざ}平^{へい}衣^えうらむうらむ渾^みを押^おて下^{くだ}
 白^{しろ}を付^つうら。小野^{おの}と云^いうらむうらむ。
 とて付^つうら。そむをうらむ玉造^{たまぞう}の小野^{おの}と云^いうら
 と我^{われ}ゆる玉造^{たまぞう}小町^{こまち}と小野^{おの}小町^{こまち}と同人^{どうじん}のあ
 らぬ物^{もの}と。人^{ひと}あははるにうらむうらむ。
 ういゆ。同人^{どうじん}のうらむうらむ。
 木^き今^{いま}十二^{じふに}のうらむうらむ。人のうらむうらむ。
 真^ま濟^{さい}法師^{ぼうし}のうらむうらむ。うらむうらむ。
 うらむうらむ。小野^{おの}の山^{やま}所^{ところ}うらむうらむ。うらむうらむ。

安倍清行の長

はつめし神よたまはるる

よと人をよめれ海ありとも

五 小町 なる所へ海へ神よあはれ

我のそはあはれ海川をさる

顯昭古今抄よ。真静善祐法師并子也善祐家通二

修后者也。是異説也

玉造と云ふ

玉造小町子仕裏書云。行路之次

歩道之間徑邊途傍有一女人容貌憔悴身体疲瘦

予問女曰汝何郷人誰家之子有父母哉無子孫歟女答

曰吾是倡家之子。良室之女也。壯時慍慍最甚。裏日

歎指深。如磐石。田舎

法。安倍清行の三善清行と。案どる母。

三善清行なるべし。世ふ善相公と云これなり。

津花貴而の父也。又善平とも多し。本約文粹

にのり。等道は達志也。寛平延喜の比の人也

言野大師 弘法大師也。大師附法傳。并元亨教書

第一ノ詳也

は清小町弘法時代前後に事なり。弘法は作

明て白く承和二年三月廿一日入定。并元亨三年其

平生著述三教指歸秘府論性靈集秘藏

寶鑰等乃書ホウヤクとて多うわむ造の文も大師は作

なりといふ魚好イサノヨシ云クニごとく寛延年中ニ少心初成

うま造の跋ハクにも大師の御作也といわ今真言

家ケへ尋ね御作の目錄ニいづとて魚好イサノヨシが

ふ所ケの目錄ニの平ヘなるニぬニや又マ造ノ樂天

が秦中吟シキウキの詩ヲを學ビと云フ白氏文集ハク卷ノ二ニ秦

中吟ノ長安ノとて貞元ニ元和ノのニはクもツわトあり

大師ニ唐ノ貞元ニ二十年ニありマつク樂天ノ死去

とて大中ニ元年ニ自ラ中ノ承和ニ十四年ニありマつク大

師ノ入室ノ也ト十二年ニ也ト然レ秦中吟ヲを學ビてシ

造ヲを作スるといフも大師ノ木ノありマつクありマつク

かレとてシゆクとてシ造ノ文ノ大師ノ筆ノ力ノありマつク

とシよクわカつクるニわカつクんニ真ニ海ノ法師ト小町

同時ニなりシやうニ古今ノ集ノありマつクなりシ真ニ海ノ弘ニ法

はク弟子トなりシ弘ニ法ノ入室ノ也ト廿六年ニ也ト貞ニ觀ノ二年

死去スなりシ又シ小町ノ也ト思ヒつク乃チありマつク業ニ平ノありマつク

てシけレのニなりシ業ニ平ノ元ノ慶ノ四年ニ也ト五ノ十ノ六ノ年ニ卒ス

大師ノ入室ノの時ニ業ニ平ノ纔ニ十ノ歳ニ也ト小町ノありマつク

十歳ノの人トなりシ也ト思ヒつク乃チありマつク業ニ平ノありマつク

